

ブルヴェ試験のフランス語*

——義務教育課程修了に必要なリテラシーとは——

「試験のクオリティーは採点にかける時間次第である。」
アントワヌ・プロ

飯田伸二**

本稿では Diplôme national du brevet (前期中等教育修了国家免状, 以下, 「ブルヴェ」) 取得に課せられている認定試験 (以下, 「ブルヴェ試験」) で出題されるフランス語の試験問題を中心的論題として取り上げる¹。試験問題の出題形式, 内容を精査することによって, フランスの義務教育課程修了時に, どのようなフランス語力が求められているかを, 具体的に検討するためである。

その準備作業として, まずブルヴェ試験とはどのような試験なのか, 若干の説明が必要であろう。1948年から実施されているブルヴェの歴史については, 上原秀一による明快な研究がある²。本稿では, なぜ近年ブルヴェへの関心が, 特にフランス語教育の分野で高まっているのかを考察する。その後, 試験問題の検討に移ることとする。

キーワード: 前期中等教育, フランス, リテラシー, 試験, 義務教育課程

* 本稿は2010年9月, 文教大学越谷キャンパスで開催されたフランス教育学会第28回大会で読み上げられた口頭発表原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。また, 本稿は平成22-24年度科学研究費補助金による研究成果の一部である (研究種目: 基盤研究C: 課題番号: 22530997; 研究課題名: 「フランス義務教育課程における国語新カリキュラムの総合的研究」)。

** 本学国際文化学部教授

¹ フランスにおけるフランス語教育を論じるのであれば, 科目名は「フランス語」ではなく「国語」とするべきかもしれない。しかし, フランスでは, とりわけ中等・高等教育においては, 「国語 (= la langue nationale)」という科目名はこれまで一度たりとも存在したことがない。常に, 古典語 (ギリシャ語, ラテン語) との対比から「フランス語」という科目名が使われてきたからである。初等教育では「フランス語」の代わりに「国語」という科目名がきわめて短期間ながら使われたことがある。しかし, それは普仏戦争敗北後, フランス社会が国威発揚に走った特別な時代のことであった (拙論「フランス語から国語へ: 第三共和政におけるフランス語教育と小学校教員養成」『国際文化学部論集』(鹿児島国際大学) 第2巻第4号, 2002年3月, 1-11頁)。こうした経緯から, 本稿では「フランス語」という科目名を使用する。

² 上原秀一「前期中等教育の修了認定試験制度の成立と展開」13-26頁 in 「フランスにおける社会的排除のメカニズムと学校教育の再構築にかんする総合的研究」平成19-21年度科学研究費補助金 (基盤研究B) 研究成果報告書, 2010年, 146頁

1. 義務教育課程とブルヴェ

1.1. 義務教育課程をめぐる状況

1976年まではコレッジ入学に試験が課せられてきたこと、さらに統一コレッジ実施後も90年代前半までは、第2学年終了後に進路指導という名の生徒の篩分けが行われてきたことは³、中等教育全体の質を保障するための方策の一環と理解できる。この点において、フランスの中等教育はつい近年までエリート主義が濃厚な制度であった。従来、ブルヴェが社会的に大きな関心を集めてこなかった理由も、エリート養成を使命とするこのような中等教育のあり方による所が大きい。しかも、ブルヴェ試験はコレッジ生徒の進路が確定した後に実施されるため、試験の可否・成績は生徒の進学にはまったく関与しないのである。

一方、バカロレアはフランス社会の中で常に大きな関心を集めてきた。フランスの中等教育では、バカロレアから遡って学年を数えることはよく知られている。このことは、中等教育がバカロレアを頂点に組織されていることを含意する。

ところが、近年コレッジをリセやバカロレアとの関連から考えるのではなく、義務教育の最終段階として捉えようとする動きが顕著になっている⁴。もちろん、こうした動きの背景には、1977年の統一コレッジの実施により、生徒が大衆化したにもかかわらず、相変わらずその教授内容、教授方法を生徒の実態に適合させようとしないコレッジに対する厳しい批判があったことは強調するまでもあるまい⁵。さらに、2000年代に入ると、エリートの養成に代わり、〈生徒の一人一人を成功に導く〉ことが、コレッジのみならず、義務教育課程の使命として大きく前景化してきた⁶。

³ *Orientation scolaire et insertion professionnelle*, INRP, 2008, « Les dossiers de la veille », p. 10 ; Jean-Paul DELAHAYE, « Le collège : une construction inachevée », *Le Système éducatif en France*, La Documentation française et CNED, 2006, pp. 95-96.

⁴ たとえば、1996年フランス語カリキュラム序文には以下のような文章を読むことができる。「コレッジは今日、すべての児童・生徒に共通するもっとも高度な教育レベルである。コレッジ以降には、進路は枝分かれする。彼らはすでに社会生活の参加者なのである。つまり、彼らは共通の基本的知識を身につけ、自らの判断を組織し、自分の考えを伝え、想像力を豊かにすることができるようになっていなければならない。」(Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche, *Enseigner au collège, français : programmes et accompagnement*, CNDP, 2005, p. 15.)

⁵ 大衆化した生徒にいまだに十分に適応できていないコレッジに対する批判については、フランソワ・デュベの著作、とりわけ以下の3点を参照のこと。François DUBET, et Marie DURU-BELLAT, *L'Hypocrisie scolaire*, Éditions du Seuil, coll. « Épreuve des faits », 2000, 231 pp. ; François DUBET, *L'École des chances, qu'est-ce qu'une école juste ?*, Éditions du Seuil, coll. « La République des idées », 2004, 95 pp. ; Idem., *Faits d'école*, Éditions de l'EHESS, coll. « Cas de figure », 2008, 310 pp.

⁶ たとえば、2005年4月23日付け「学校の未来のための基本計画法」第2005-380号の出発点となった、報告書のタイトルは「すべての児童生徒の成功のために」(*Pour la réussite de tous les élèves : rapport de commission du débat national pour l'avenir de l'école présidé par Claude THÉLOT*, La documentation française / CNDP, 2004, 159 pp.)であった。

フランス社会が義務教育に注ぐ視線の変化は、2000年代の法整備、施策にも大きく反映している。2005年には義務教育期間中に到達すべき学習目標を定め、全ての児童生徒がそれに到達するための手段を保証した「学校の未来のための基本計画法」が公布された⁷。さらに翌2006年には、この法律を実効化する施策の一環として、義務教育課程で修得すべき学習内容の詳細が、「共通基礎知識・技能 (socle commun de connaissances et de compétences) にかんする政令」として施行された⁸。これらの法整備、施策は、国家の責任として義務教育課程の枠組みの中で、どのような知識・技能を児童・生徒に教授し、かつ修得させるのか、また、そのためにどのような手段・方法を講じるのかを定めた点において、義務教育課程の再定義と理解することが許されよう。

近年展開されている義務教育課程にかんする以上のような議論、改革の流れを受けて、2011年からは、共通基礎知識・技能の完全修得がブルヴェ取得の基本要件となった。また、この決定について、国民議会の文部文化委員会は各コレージュにおいて個々の生徒が共通基礎知識・技能を修得したかどうかを評価する以上、全国的に実施されているブルヴェ試験そのものは廃止すべきとの提言を2010年4月に行っている⁹。

フランスの教育制度改革の中で、義務教育課程およびブルヴェをめぐる社会・政治的状况を確認したところで、フランス語という科目の中でブルヴェの試験が近年どのように議論されてきたかを、整理することとしよう。

1. 2. 1996年カリキュラム改革とブルヴェ

フランス語教育の分野で、ブルヴェの試験が大きな議論を呼んだのは、2000年代に入ることである。それに至るまでの経緯を素描し、なぜ今がブルヴェの試験問題を分析するのに適った時期であるのかを説明しておこう。

⁷ « Loi n° 2005-380 du 23 avril 2005 d'orientation et de programme pour l'avenir de l'école », [texte disponible sur <<http://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do?cidTexte=JORFTEXT000000259787&dateTexte=>>, vu 1^{er} septembre 2011].

⁸ « Décret n° 2006-830 du 11 juillet 2006 relatif au Socle commun de connaissance et de compétences », [texte disponible sur <<http://www.legifrance.gouv.fr/affichTexte.do?cidTexte=JORFTEXT000000818367&dateTexte=>>, vu 1^{er} septembre 2011].

なお、本稿では「compétences」を「技能」と訳したが、この訳語の問題点については以下を参照：Ministère de l'éducation nationale de la jeunesse et de la vie associative, « Mise en œuvre du Livret Personnel de Compétences : au collège », août 2008 [diaporama disponible sur <http://media.eduscol.education.fr/file/socle_commun/68/6/LPC-presentation-enseignants_163686.pdf>, vu le 12 septembre 2011]; 細尾萌子「教育課程論の視点から：compétenceは技能や能力ではない」6-7頁 in「フランス教育学会第29回大会発表要旨集録」(2011年9月10日(土)、11日(日)、於：武庫川女子大学)。

⁹ La commission des affaires culturelles et de l'éducation, *Rapport d'information sur la mise en œuvre du socle commun de connaissances et de compétences au collège* / présenté par Jacques GROSPELLIN, Assemblée nationale, 2010, 132 pp. ブルヴェの今後については、とりわけ本報告書38-40頁および60-61頁を参照のこと。

1996年、初等教育のカリキュラム改革を引き継ぐ形で、コレージュ第1学年にあたる第6年級 (classe de sixième) から新カリキュラム (以下、「1996年カリキュラム」) の導入が開始された。以後、1999年まで、1年級ごとにカリキュラムが改訂されていくこととなる。1996年カリキュラムは、フランス語教育の分野では多くの点で革新的であった。その基本的な方向性は、以下の3点にまとめることが可能である。

まず注目すべき特徴は、文法、とりわけ文文法の重要性が著しく低下したことにある。教員用カリキュラム解説読本 (accompagnement) は、この変更を「今後のフランス語教育は生徒の言語運用の実態を考慮して行うべきだ」という新たな教育方針の導入によって説明している¹⁰。しかし、教育現場では、大衆化したコレージュで従来通りの細かな文文法を教えることはあまりに効率が悪いという認識があったことは否定できまい。

第2点は、文学理論、テキスト文法にかんする専門用語・概念の大胆な導入である。これは二つの側面から説明できよう。一つは、^{ディシプリン}科目に関連する知のあり方の変化である。コミュニケーションの場における言語運用の実態を正確に記述するための、新しい概念・用語が生まれ、中等教育の教育現場に翻訳・移行可能なほど成熟した (少なくとも、1996年カリキュラムの作成者たちはそう考えた)¹¹。もう一つの側面は、学校という場における知の力関係である。すなわち、他の科目に対し、フランス語という科目の独自性、特殊性を担保するには専門用語の使用が避けられなくなってしまったのだ。これは、1996年のコレージュ用カリキュラム、2000年のリセ用カリキュラム作成を担当した文学系科目専門部会 (Groupe technique disciplinaire lettres) の部会長を務めたアラン・ヴィアラが繰り返し主張していた論拠であった¹²。

第3点として教材の多様化が指摘できよう。これまでの前期中等教育におけるフランス語の授業では、大半の時間が文法規則の学習とフランス文学史に確固とした地位を占めている作家の先品の紹介・分析に充てられてきた。この伝統に対して、1996年カリキュラムは大胆な二つの変革を提言した。一つは、文学と並んでさまざまな資料 (たとえば、旅行ガイドや歴史年表)、新聞、辞書、イメージを読解の教材として扱うことである。もう一つの改革は、文学を学ぶ際には、古典作家、文学的名声を持つ現代作家だけでなく、若者向け文学を授業の教材として、あるいは生徒の課外読書の補助教材として積極的に取り入れることだ。

カリキュラムのこれらの大胆な改革の要因として、ここ30年来、学校におけるフランス語、そして文学の地位が大きく変化したことが指摘できる。ここでは、アンヌ＝マリー・シャルチエとジャン・エブラールの綿密な研究に依拠しながら、学校におけるフランス語を取りまく環境の変化には三つの要因が関与していたことを確認しておくに留める。すなわち、テレビ・イ

¹⁰ Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche, *op. cit.* とりわけ27頁を参照のこと。

¹¹ *Ibid.*

¹² Alain VIALA, « Questions de programmes : éléments d'histoire et perspectives », pp. 163-177 in Michel JARRETY (sous la direction de), *Propositions pour les enseignements littéraires*, PUF, 2000, 190 pp.

インターネットに代表される知の媒体の普及、進路選択における科学、とりわけ数学文化の重要性の増大、そしてコレッジ人口の大幅な増加である¹³。

1996年カリキュラムは、文文法と文学を教えることを自らの使命と考えてきたコレッジの教員や、中等教育に携わる教員の養成を主な社会的使命とする大学教員から反発を受ける。しかも、1996年カリキュラムの施行がコレッジ全体に及んだ1999-2000年の学年、つまり2000年の6月にはブルヴェの試験問題の内容・形式にも大きな変更が生じた。この変更は、コレッジのカリキュラム改革の実態を、より精確にブルヴェ試験に反映させるための施策である。さらに、2009年9月からコレッジでは1996年カリキュラムに代わる新カリキュラムが施行されている。

このように、ブルヴェ試験のフランス語を取りまく状況を概観すると、現在は2000年に問題の形式が変更されて以来、どのような試験問題が出題され、どのような知識・能力が求められてきたのかを調査し、検証するのに適当な時期だと考えられる。試験形式の変更後、10年余が経ち、試験問題のコーパスのまとまった蓄積ができたからである。しかも、先に言及したように、共通基礎知識・技能が義務教育課程に浸透し、新カリキュラムがコレッジ最終学年でも施行されるようになる数年後には、ブルヴェの形式が再び変更される可能性が小さくないからである。

以上のような、経緯・背景を踏まえ、本稿では以下の点に絞って論及することとする。まず、ブルヴェのフランス語試験とはどのような形式で行われているのかを紹介する。ブルヴェ試験の実態は日本では具体的な紹介がまったくなされてないうえ、たとえば日本の高校入試とはその内容および問題形式を大きく異にするからである。

さらに、フランス本土で出題された過去11年間（2000年～2010年）の試験問題を精査し、どのような問題が出題されているのかを整理したうえで、試験問題には、どのような特色があるのかを詳らかにする。そのうえで、フランスでは義務教育課程修了時にどのようなフランス語の知識・能力が求められているのかについて考察する。

2. ブルヴェ試験とは

ブルヴェ試験とはどのような制度なのか簡潔に説明することからはじめよう。ブルヴェ試験の形式、実施方法、また内容について詳細に指示している1999年9月6日付の「ブルヴェの授与方式にかんする業務通達 (Note de service)」によれば、ブルヴェ試験は普通課程 (série collège)、技術課程 (série technologique)、職業課程 (série professionnelle) の3課程に別れて実施されている。フランス語については、問題文は課程の違いを問わず同一であっても、課

¹³ Cf. Anne-Marie CHARTIER et Jean HÉBRARD, « De la culture héritée aux savoirs partagés », pp. 443-464 dans *Discours sur la lecture (1880-2000)*, BPI-Centre Pompidou et Fayard, 2000, 762 pp.

程ごとに異なっているけれどもよいことになっている¹⁴。ただし、絶対的多数の受験者は普通課程の試験を受験している。2010年を例にとると、第3年級（コレッジ第4学年）に在籍する生徒74万7153人（但し、特別学級を除く）に対し、ブルヴェ試験受験者は74万8184人にのぼる。受験者の数が第3年級在学生の数をわずかながら上回っているのは、職業リセ・特別学級の生徒の一部や若干数の社会人もブルヴェ試験を受験しているからだと考えられる。これらの受験者のうち、67万4973人が普通課程の試験を受けている。これは全受験者の90.2%に相当する（2009年は89.4%）¹⁵。この数字から、普通課程の試験問題を、義務教育課程修了時にどのようなフランス語力が必要なのかをはかる重要なバロメーターの一つとみなすことが許されよう。本稿のコーパスを普通課程の試験問題に限定する所以である。

先述のように、ブルヴェ試験は、バカロレア試験（examens）、あるいはグランド・ゼコール入学のための競争試験（concours）とは異なり、その合格・不合格は上級学校の進学に影響を及ぼさない。

また、ブルヴェ試験の合否判定においては、筆記試験の占める重要性が相対的に低い。ブルヴェ試験では、フランス語以外にも、数学、地歴公民の筆記試験が行われるのだが、これら3科目の筆記試験に加えて、平常点が考慮される科目が多数（全部で11～12科目）あるために、筆記試験が占めるウエイトは相対的に低くなってしまっているのである。現在の配点を紹介しておく、平常点は各科目20点、筆記試験が各科目40点で、獲得点が総点の半分以上で合格となる。つまり、試験の合否は平常点で決まるといってよいほど、総点に占める平常点の比率が高いのである¹⁶。

3. ブルヴェ試験に必要な読解力

3.1. ブルヴェ試験フランス語の問題形式

ブルヴェをめぐる状況、ブルヴェ試験の制度について最低限の情報を確認したところで、フランス語試験問題についての、より具体的な検討に移ろう。まず、先ほど参照した1999年9月6日付け業務伝達を再び参照する。この行政文章は、各科目について、どのような知識・能力を量ろうとしているのかを知るうえで貴重な資料である。業務通達はフランス語で評価すべき習得能力（acquisitions à évaluer）として、以下の3点をあげている。

¹⁴ « Note de service n° 99-123 du 6-9-1999 relative aux modalités d'attribution du diplôme national du brevet », *Bulletin officiel de l'éducation nationale*, n° 31 du 9 septembre 1999.

¹⁵ Ministère de l'éducation nationale, *Repères et références statistiques sur les enseignements, la formation et la recherche*, DEPP, 2010, pp. 99 et 221.

¹⁶ « Note de service n° 99-123 du 6-9-1999 relative aux modalités d'attribution du diplôme national du brevet », *op. cit.*

ことばの習熟（語彙、統辞、綴り字にかんする）

文章を理解する能力

筆記で自分の考えを明確に表し、正しく判断しながらディスクールを使い分ける能力¹⁷

ディスクールという用語については若干の補足説明が必要であろう。1996年カリキュラムによれば、ディスクールは「口頭、または文章でのコミュニケーション行為で言語を運用すること」¹⁸、と定義されていた。日本語では、言語運用と訳されることも多い¹⁹。

1996年カリキュラムでは、ディスクールが叙述、記述、説明、論証の4つのタイプに分類され、この順序をもとに、学年ごとの学習項目が配列されていた。カリキュラムはコレッジ4年間の学習項目をディスクールに従って、以下のように配列している。

第6年級：叙述中心の文章（le pôle narratif）と論証中心の文章（le pôle argumentatif）を同定する：

さまざまなタイプの物語文を読み、書き、学習する；論証という観点から口頭表現の練習をする；

第5－4年級：叙述中心の文章については、叙述の学習を継続し、描写の学習を発展させる；論証中心の文章については、説明的なタイプの文章の学習に触れる；

第3年級：論証中心の文章については、論証の主な形を学習する。叙述中心の文章についてはさまざまな形の物語文を書く練習を重ねる²⁰。

業務伝達は試験に必要な能力ばかりでなく、大問の種類、配点、時間配分についても詳細に指示している。大問は読解、書き換え、ディクテ、作文の4種類である。以下、実際の試験で出題される順に沿ってそれぞれの大問のねらいを素描していくことにしよう。

まず読解問題だが、配点は40点満点中15点である。これは設問の形式・内容において、日本の高校入試で出題されている国語筆記試験にもっとも近い。読解問題については、後により詳細に検討を行う。

読解問題と同時に、書き換え問題（la réécriture）が出題される。これは、与えられた数行の文章を指示に従って書き換える問題である。読解問題に出題された問題文から選ばれた数行が、書き換え問題の題材として使われるのが一般的である。たとえば、主語を〈彼〉から〈彼ら〉に、現在形を過去形に、あるいは文章の法・話法を指示に沿って変えるといった問題である²¹。

¹⁷ *Ibid.*

¹⁸ Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche, *Enseigner au collège, français : programmes et accompagnement*, CNDP, 2005, p. 14.

¹⁹ 小林順子訳「学習指導要領〈コレッジ第6級〉：フランス語」, 76-86頁 in フランス教育課程改革研究会『フランス教育課程改革資料集』2002年（平成9-12年度文部省科学研究費補助金基盤研究（B）中間報告書）

²⁰ *Ibid.*, p. 15.

²¹ ブルヴェの問題の収集に当たっては、いくつかの学習支援サイトおよび、受験参考書を利用した。文末の文献リストおよびサイトリストを参照願いたい。

以下の文を書き換えなさい。「その朝、アリは疲れていた。彼は、テントのように彼を寒さから守ってくれるミリタリー毛布にくるまって、[...] 寝る前に一口がぶ飲みするワインのことを思っていた (◀ Ce matin-là, Ali était fatigué. Il pensait à la bonne lampée de vin qu'il allait boire avant de se coucher [...] sous sa couverture militaire qui l'arbitrait du froid comme une tente. ▶)。」

「アリ」を「アリとマルセル」に置き換えなさい、同時にそのために必然的に生じるすべての変化を記すこと。

(2009年、フランス本土²²、ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ【橋の下の子供】)

〔問題文〕54-55行「あなたを見て [...] 答えた (◀ En vous voyant [...] répodu ▶)」。この一節を大過去で書き換えなさい、同時に〔主語を〕1人称単数形から3人称複数形にすること。

(2007年、フランス本土、ヴィクトル・ユゴー【レ・ミゼラブル】)

「わたしにはまったくどうでもよかった。何の用事もないわたしには。わたしは誰にも知られていなかった、誰からも見られていなかった、誰からもたしなめられることはなかった (◀ Cela m'était bien égal, à moi qui n'avais aucune affaire. On ne me connaissait pas, on ne me regardait pas, on ne me reprenait pas ▶)。」

この一節を条件法過去(17行目「わたしは…することもできたであろう」)で使われている時制〔ママ〕で書き換えること、同時に1人称単数形の代わりに1人称複数形を使うこと。

(2005年、フランス西部地区、ジョルジュ・サンド【私の人生の物語】、第4部第15章、1854)

例からも明らかのように、書き換え問題は、文法、綴り字の知識、とりわけ主語、時制、法を変更した時に文章中に生じる語形変化(morphologie)にかんする知識を問う問題と位置づけることができる。

これら二つの課題に充てられている解答時間は1時間15分である。その後、15分間のディクテが行われる。ディクテとは聞き取りのことで、試験官が読み上げる文章を、受験生は忠実に筆写していかなければならない。これは、フランスでは伝統的な問題であり、特に19世紀から20世紀初頭にかけて小学校や小学校の教員採用試験で盛んに行われてきた²³。フランスの初等教育、前期中等教育でディクテが重視されてきたのは、フランス語の言語上の特性による所が大きい。すなわち、同音異義語が多い、発音されない語形変化がとりわけ動詞、形容詞では

²² フランス本土におけるブルヴェの試験は2007年から全国統一問題によって実施されている。それ以前はフランス本土をいくつかの大学区を併せた4地区に分け、地区ごとに別個の問題が出題されていた。四つの地区は以下の通り。

北部地区(第1グループ):アミアン、クレティユ、リール、パリ、ルーアン、ヴェルサイユ大学区

西部地区(第2グループ):ボルドー、カーン、クレールモンフェラン、リモージュ、ナント、オルレアン・ツール、ボワチエ、レンヌ大学区

東部地区(第3グループ):ブザンソン、ディジョン、グルノーブル、リヨン、ナンシー・メス、ランス、ストラスブール大学区

南部地区(第4グループ):エクス・マルセイユ、コルシカ、モンペリエ、ニース、トゥールーズ大学区

²³ 学校で行われるディクテの難易度の推移、生徒のフランス語力をはかる際にディクテが担ってきた役割の変遷については、以下を参照。André CHERVEL et Danièle MANESSE, *La Dictée : les Français et l'orthographe, 1873-1987*, Calmann-Lévy et INRP, 1989, 287 pp.

頻繁におこるといった特徴である。そのため、ディクテは単に綴り字能力をはかるだけでなく、文章の理解力を問うのにも適した問題と見なされてきたのである。書き換え問題、ディクテの配点は4点から6点で、二つの大間をあわせて10点となることが定められている。

読解問題、書き換え問題、ディクテの三つの大間終了後、15分の休憩を挟んで、作文 (la redaction) が行われる。解答時間は1時間30分、配点は15点である。なお作文問題ではフランス語辞典の使用が認められている。

書き換え問題、ディクテにも近年のフランス語教育が抱える問題が反映している。とりわけ、2000年以降のブルヴェ試験ではディクテの重要性が低下していることは、フランス語教育の方向性、また基礎学力の推移を考えるうえで示唆的である²⁴。

3. 2. 読解問題

業務通達は読解問題に使う問題文の数、長さ、設問の内容までも規定している。

受験者に配布されるのは、フランス語を使用する作者による20行から30行の長さの文章である。これが理解力をはかる設問の土台となる。これらの設問の少なくとも一つは語彙にかかわり、文章理解のうえで重要な言葉の意味を文脈の中で問う。文法の設問は、ディスカールの働きとコミュニケーションの状況、文章の組織、文の構造を問う。意味の構成要素 (統辞上の綴り字、句読法) とみなされる場合、設問のいくつかは綴り字について問うこともありうる²⁵。

日本の国語の試験問題との機械的な比較はつつしむべきであろうが、読解問題の解答時間からして、受験者が読む問題文は、その量も種類も日本の高校入試から比べるときわめて少ない。実際には過去11年間の試験問題の中には、この長さを大きく逸脱する問題文も少なからず散見する。しかし、その場合でも日本の高校入試においてわずか1時間足らずの解答時間中に課せられる問題文の数と量と比べれば、ブルヴェ試験の問題文の短さが破格であることに変わりない。

3. 2. 1. 問題文

次に、どのような文章が問題文に選ばれているのかを検討しよう。業務通達は、文章のジャンルや内容までは指示をしていない。しかし、1996年カリキュラムがコレージュ第4学年で施行されはじめた1999年末にフランス国民教育省が作成・発表した『ブルヴェ普通課程フランス

²⁴ 「『正しい筆記上の形』を評価しようと努め、「自分自身の文章を書く」生徒の能力を重視している以上、綴り字の評価形式としてディクテだけに頼ることはもはや無理である。』, *Diplôme national du brevet, série collège : Français : annales zéro*, CNDP-DESCO, 1999, p 3.

²⁵ « Note de service n° 99-123 du 6-9-1999 relative aux modalités d'attribution du diplôme national du brevet », *op. cit.*

語試験要綱】(以下、『要綱』)²⁶からは、問題文として用いられる文章の内容・ジャンルについて行政側の意図を推定することが可能である。この資料は、国民教育省学校教育局(DESCO)と国立科目教育情報センター(CNDP)が作成したものだ。新カリキュラムに適合した新しいブルヴェの試験問題の雛形を行政サイド自らが提示し、現場での生徒の指導・試験準備に資することを意図しての措置である。1996年カリキュラム作成に直接携わった専門部会から3名が執筆者として参加している。

コレッジのカリキュラムの抜本的改訂は、1977年に統一コレッジが実施されて以来、今日までほぼ10年周期で行われてきた。しかし、カリキュラム改訂にあわせて業務通達でブルヴェ試験の新形式を指示したうえで、さらに『要綱』で具体的に試験問題の全体像および模範解答の指針が開示されたことは、1996年カリキュラム施行の時だけである。この事実は、当時のカリキュラム改訂は、前期中等教育におけるフランス語教育のあり方に大きな方向転換を加えるべく準備されていたことを強く示唆するものである。

このように、従来のフランス語教育のあり方を抜本的に見直すべく意図された一連の改革の一環を成す『要綱』に集められた問題文にはどのような傾向が読み取れるのだろうか。それを一言でまとめると、〈問題文の多様化、およびそれに伴う脱文学化〉と形容することが許されよう。それは『要綱』に収められている11の問題例の出典を見れば明らかである²⁷。

| 問題番号 | 作者 | 作品名 | ジャンル | 時代・備考 |
|------|----------------------------|-------------|-------|----------------------|
| 1 | リュック・ブラモンド | 「モノ・ボリス」 | ポップス | 20世紀 |
| 2 | ディディエ・デナクス | 「奇妙なクイズ番組」 | 小説 | 20世紀 |
| 3 | コリン・ヒギンズ ジャン＝クロード・カリエール | 「ハロルドとモード」 | 演劇 | 20世紀 |
| 4 | アルチュール・ランボー | 「驚いた子供たち」 | 詩 | 19世紀 |
| 5 | 匿名 | 「社会格差」 | 新聞記事 | 20世紀、挿絵付、 「ル・モンド」 |
| 6 | アルベール・カミュ | 「最初の人間」 | 小説 | 20世紀 |
| 7 | ヴァンサン・イスバ | 「陶器製のスポンジ」 | 寓話 | 20世紀 |
| 8 | フランソワ＝ルネ・ド・シャートー トリアン | 「墓の彼方の回想」 | 自伝 | 19世紀 |
| 9 | ラ・ブリュイエール | 「人さまざま」 | 同時代批評 | 17世紀 |
| 10 | 匿名 | 視聴率調査回答者の生活 | 雑誌記事 | 20世紀、「テレマ」 |
| 11 | カルヴォ | 「野獣は死んだ」 | 絵本 | 20世紀、挿絵付 |

全体の4割近くを占める4問で、問題文が文学外のテキストから採られている。中等教育におけるフランス語教育は言語教育と文学教育からなる、という意識がフランス語教員の職業アイ

²⁶ *Diplôme national du brevet, série collège : Français : annales zéro*. CNDP-DESCO, 1999, 42 pp. 『要綱』の前半部分は日本語で参照可能である。拙訳、「コレッジ版フランス語試験要綱」、『国際文化学部論集』(鹿児島国際大学), 第9巻第1号, 2008年6月, 63-87頁。

²⁷ これら11問中、版権の問題からカミュとヴァンサン・イスバによる問題文と、それについての設問は掲載されていない。「後に補足」との但し書きがあるものの、今日まで、件の箇所は空欄のままである。

デンティティーに深く根付いている事情を考慮すると、こうした問題文の構成は、大胆な試み＝提言である²⁸。事実、『要綱』の前文は文学以外のさまざまなジャンルに属す文章からでも問題作成が可能であることを、「本質的な変更点」として強調している²⁹。

《文学的》とみなされる文章、あるいは新聞雑誌の記事、詩、演劇、シャンソン、論争を意図した記事あるいは社会、過去の出来事についての考察、文章だけ、あるいはイメージつきの文章、そしてイメージも考察の対象となります…あらゆる可能性が開かれているのです。この要綱がその証明です！³⁰

また、第2問と第10問はテレビ批判をテーマとしている点にも注目しよう。フランス語教員は、テレビが知識・娯楽の普及装置として社会に普及したことが、自分たちの担当科目が生徒たちの間で人気を失っていった主な要因と考える傾向が強いからである³¹。さらに、5番目の『ル・モンド』の記事と最後のカルヴォのテキストには大きな挿絵が付されている。1985年のカリキュラムから、フランスでは文学作品に関連する絵画はもちろんのこと、映画や広告などのイメージ全般の読解をフランス語という科目の学習対象に含むことが明記されているからである³²。

しかし、2000年から2011年までにブルヴェ普通課程の6月セッションに出題された問題を調査した結果、実際の試験問題に行政の意図が十分に反映されているわけではないことが判明した。確かに、設問の形式、配点にかんしては『要綱』の雛形がほぼ忠実に踏襲されている。対照的に、問題文の選択については『要綱』が示した問題文の多様化・脱文学化という方針はまったく活かされていない。問題文の原典はほぼ文学に限定されているのである（表1）。文学作品という範疇から外れるのは、ブラッサンスのシャンソン（2006年フランス北部）、探検家ジャン＝ルイ・エチエンヌの北極探検記（2005年、フランス東部）、演出家ピーター・ブルックの「観客への手紙」（2000年、フランス西部）だけである。しかも、これらのうち、ブラッサンスの歌詞はフランスでは半ば文学作品のように、歌詞だけがさまざまな形で出版されている。また、文学研究者による研究も精力的に展開されている。ピーター・ブルックの手紙も、演劇とは何か、現代社会において果たして演劇に何が可能なかが論じられている。つまり、文学という

²⁸ 1925年以降のコレージュのカリキュラムを検討した結果、呼称に違いはあるにせよ、その構成の根幹は文法と語彙を中心とする言語の学習と学習すべき文学作品のリストであることは今日まで変わらない。

²⁹ *Diplôme national du brevet, série collège : Français : annales zéro*, CNDP-DESCO, 1999, p. 3.

³⁰ *Ibid.*, p. 4.

³¹ この点にかんしては、フランスでは1982年までテレビ放送が国の独占事業であり、有名な映画監督、演劇人、作家、文化人がテレビ番組の制作者あるいは出演者として、テレビに関わる機会が多かったという事情を考慮する必要があるであろう。Cf. Anne-Marie CHARTIER et Jean HÉBRARD, « De la culture héritée aux savoirs partagés », pp. 443-464 dans *op. cit.*

³² Ministère de l'éducation nationale, *Collèges : programmes et instructions*, Centre national de documentation pédagogique et Ministère de l'éducation nationale, coll. « Livre de poche », 1985, 348 pp.

範疇から完全に外すことができる作品はここ十余年の間、唯一ジャン＝ルイ・エチエンヌの北極探検記だけということになる。こうした事実は、近年の行政側の意向にもかかわらず、コレージュのフランス語においては文学教育が圧倒的な重要性を占めていることを改めて裏付けるものである。

3. 2. 2. 設問

ここからは、読解問題の設問を検討していこう。まず、再び「要綱」を参照しよう。「要綱」には設問にかんし、業務通達には見出せなかった、より興味深い記述を読むことができる。設問がどのように編成、組織されるべきかを、具体的に示しているからである。

a. 設問の構成：「読解の軸」

設問の編成について、「要綱」は「受験者の解答を導く読解の軸 (axes de lecture)」を設け³³、「読解の軸」に沿って複数の設問をまとめて配置するように提案している。一連の設問の土台となるわけだから、大抵の場合、読解の軸こそ問題文の主要テーマに他ならない。これが、受験生には解答への貴重な手助けとなることはいうまでもない。過去の読解問題を調査したところ、一つの試験問題に「読解の軸」が三つ程度設定され、その軸に沿って合計15問から20問程度の設問が付されるのが一般的である。いくつかの例を紹介しよう。

2011. フランス全土：ロマン・ガリー「空の根っこ」

- I. 囚人たち (配点4 = 0.5点 × 5題 + 1.5 × 1題)
- II. 敏腕家 (配点6 = 1点 × 3題 + 0.5点 × 6題)
- III. 幸運をもたらす作り話 (配点5 = 2点 × 1題 + 1.5点 × 1題 + 1点 × 1題 + 0.5点 + 1題)

2009. フランス全土：ジャン＝マリー＝ギュスターヴ・ルクレジオ「橋の下の子供」、2000

- I. ゴミ拾いの肖像 (配点6 = 1点 × 3題 + 0.5 × 6題)
- II. 発見 (配点5 = 1点 × 3題 + 0.5点 × 4題)
- III. 橋の下の子 (配点4 = 1.5点 × 1題 + 1点 × 1題 + 0.5点 × 3題)

2008. フランス全土：エミール・ゾラ「ミシュー大将」 in 「ニノンへの新しいお話」

- I. 決定的な場面 (配点5 = 1点 × 3題 + 0.5点 × 4題)
- II. ミシューと話者 (配点5.5 = 1.5点 × 2題 + 1点 × 1題 + 0.5点 × 3題)
- III. 奇妙な奴 (配点4.5 = 1.5点 × 1題 + 1点 × 1題 + 0.5点 × 4題)

「要綱」によると新形式のブルヴェ試験以前には、設問は問題文を構成する〈テーマごと〉に配列されるのではなく、「文法」、「語彙」「理解」といった〈学習項目ごと〉に配列されていた³⁴。

³³ *Diplôme national du brevet, série collège : Français : annales zéro*, CNDP-DESCO, 1999, p. 4

³⁴ *Ibid.*

設問が〈テーマごと〉に配置されるようになった理由は二つ考えられる。一つは平素の授業の進め方との整合性を担保するためである。1996年カリキュラム施行の際、フランスでは文法、語彙、文章理解を別個に教えるのではなく、一つのテーマのもとに集められた文章群の学習（これを「セカンス」と呼ぶ）を通じて教えるよう強く推奨されている。これが、いわゆる学習項目間の「垣根を取り除いた教授法（décloisonnement）」である³⁵。もう一つの理由は、問題文の全体的な理解を助ける「読解の軸」、および文章中の難解な箇所の理解を助ける「文法、語彙にかんする考察」を手がかりに受験者が「問題文の意味を構築する」ことができるように導くためである。これは1) 問題となる文章の手がかりの発見→2) 解釈→3) 意味の構築というプロセスを踏む、「分析的読解」と呼ばれる文章理解の方法である³⁶。リセにおけるフランス語の授業や試験でも、基本におなじ手法が踏襲されている。また、「意味を構築する」とは、単に文章の意味を把握することに留まらず、文章のディテール、文体に注意を払うことにより、どのように意味が生成するかを考えることを意味する。「分析的読解」について、若干の例をあげて説明しよう。

読解の軸：I. 敵意に満ちた世界

1. [省略]
2. [省略]
3. 「その日」(1行目) から「偶然」(28行目) まで
 - a) 学校の門、マンション、歩道・舗道の特徴づける語句、表現を列挙しなさい。
 - b) どのような効果が産みだされますか？

(2005, 北部地区, ビエール・ベジュ【小さな女城主】)

問題となっている一節で、主人公がどのような状況に直面しているかを問う問題である。設問 b) はかなりの難問だが、設問 a) を解くことで、受験者は主人公と関わりの深い場所（学校、家、通学路）がどのような表現・語句で描かれているかを把握することができる。これは、機械的な作業なので、解答は比較的容易であろう。そうすると、設問 a) 解答のために受験者自身がリスト・アップすることになる表現（「閉ざされた門」、「彼女も母も暮らしはじめてようやく二ヶ月」で、「近くにはない」マンション、「敵意に満ち」、「滑りやすい」歩道）と、「読解の軸」を導きの糸として、主人公がおかれた状況の困難さ、展望のなさや答えにまとめることは、もはやさほど困難ではないだろう。別の例を紹介しよう。

読解の塾：III. 世界の果ての丘

1. 「海の深い静けさを見下ろす切り立った岬の上にある、互いに寄り添った家々からなる小さな (petit) 白い村」
 - a) 「小さな (petit)」, それから「海の深い静けさを見下ろす (qui dominait le calme profond des

³⁵ Ibid.

³⁶ Ibid.

eaux)」の品詞の種類を述べなさい。(配点0.5)

b) この文はどんなディスクールの形態に属しますか。(配点0.5)

c) この文は村と風景にかんしてどのような印象を与えますか。最終段落の他の要素に基づいて、あなたの答えを詳しく述べなさい。(配点1.5点)

(2006, 南部地区, ローラン・ゴード「スコルタの太陽」, 問題文強調)

設問 a) は日本人フランス語学習者にとっても、いわゆる初級文法の範疇に入るきわめて基礎的な問題である。設問 b) は日本の中等教育では学ぶ機会がまったくないテキスト文法にかんする問題である。しかし、1996年カリキュラムではコレッジ第2学年にあたる第5年級で学習する事項であることから、当時の受験者は解答に苦労しなかったはずである³⁷。一方、設問 c) は中々の難問である。問題文全体が醸し出す雰囲気や正しく把握したうえで、文章で表現することが求められるからである。しかし、読解の軸のタイトル「世界の果ての丘」や、前の設問 a), b) の対象となっている一節から読みとれる「深い静けさを見下ろす切り立った岬」「互いに寄り添った家々からなる […] 村」といった表現は、この村が位置する所が世界から隔絶した孤独な場所であること読みとる有力な手がかりになる。読解の軸、設問の構成が解答者を問題文の全体的な理解に導く手助けになっているのである。

b. 設問の難易度：ばらつき

個々の設問についてまず指摘すべき特徴は、設問の難易度の幅が広いことだ。いずれの試験問題でもこうした傾向が確認できる。

設問の中には極端に平易な問題が散見する。義務教育課程修了を間近に控えた受験者にあえて問うのが憚れるような、自明の事柄にもあえて設問を立てているのである。

この場面はどこで繰り広げられていますか。(配点0.5)

(2004, 東部地区, ミシェル・トゥルニエ「スズラン・サービスエリア」 in 【オオライチョウ】)

この一節の主人公は誰ですか？ あなたがそれを選んだ理由を二つ述べなさい (配点1)

(2002, 北部地区, エドモン・ロスタン【シラノ・ド・ベルジュラック】)

この文章の作者は誰ですか？ (配点0.5)

この文章は誰に向けられたものですか。(配点0.5)

(2000, 西部地区, ピーター・ブルック, 「観客への手紙」)

³⁷ ただし、2009年から施行されはじめた新カリキュラムではテキスト文法にかんする学習事項は削除された。Cf. Ministère de l'éducation nationale, « Programmes du collège : programmes de l'enseignement du français », *Bulletin officiel spécial*, n° 6 du 28 août 2008, 13 pp. また新カリキュラムの背景、特徴については以下を参照。拙論、「文法の回帰：2009年施行コレッジ新カリキュラムをめぐって」, 『Stella』(九州大学フランス語フランス文学研究会) 28号, 2009年12月, 67-78頁; 「コミュニケーションから文法と文学史へ：2009年コレッジフランス語プログラムの理念と背景」, 『日仏教育学会』16号 (通巻38号), 2010年3月, 101-111頁

最初の設問については、以下の三つの理由から容易に正答が見つかる。すなわち、出典のタイトル、そして「今朝、スズラン・サービスエリアでは」という問題文の書き出し、さらにこの設問が「枠組みと登場人物」という「読解の軸」に置かれている事実などから、場面がスズラン・サービスエリアであることは容易に判断がつく。2番目の設問も、問題文では圧倒的にシラノの台詞が多いこと、また出典のタイトルが『シラノ・ド・ベルジュラック』であることから、解答に躊躇う受験者は稀であろう。また3番目に引用した二つの設問への解答も、以下の四つの理由からきわめて容易である。すなわち、問題文には「観客への手紙」という表題が付されている。問題文の書き出しは「親愛なる観客の皆さん」である。また、問題文末尾には「ピーター・ブルック」という署名がある。さらに、問題文には「この手紙は1998年5月11日から17日まで「開幕」キャンペーンに参加するすべての劇場で読まれるか、掲示される」という注が付されている。これだけのヒントがあれば誤答の余地はまずあるまい。

c. 文法・語法

先程の分析的読解についての考察の際に指摘したように、ブルヴェでは日本の大学でも1～2年生で教えそうな、いわゆる初級文法や初歩的な語法の知識があれば解けるような設問が数多く見受けられる。

「何か (quelque chose)」の品詞を言いなさい。(配点0.5)

(2009年、フランス本土、ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ【橋の下の子供】)

「毎日リュシアンは私に手紙を送ってきた。」動詞の時制を同定し、その用法を説明しなさい。(配点1)

(2002年、東部地区、ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ【春とその他の季節】)

第1段落で、主語人称代名詞をあげなさい。(配点0.5)

(2001年、西部地区、ジャン＝クロード・イッソ【マルセイユ】)

「そこにすべてを置き、すべて放り投げろ、すべてぶち込め。建物を壊せ」

a) ここで使われている動詞の法は何ですか？(配点0.5)

b) ガヴロッシュの台詞から、この法を使わない命令文を少なくとも2つあげなさい。(配点1)

(2000年、北部地区、ヴィクトル・ユエゴ【レ・ミゼラブル】)

最初の設問は不定代名詞にかんする知識、2番目は半過去の用法についての初歩的な知識があれば間違えることはあるまい。3番目の主語人称代名詞にいたってはフランス語で最初に学習する文法事項の一つだ。最後の命令法、命令文にかんする問題はやや難しい。とはいえ、不定法を使った命令文や、軽い命令を表す単純未来の用法も、少し詳しい初学者用参考書では必ず解説してある事項である。義務教育課程を終えつつあるフランス語話者を戸惑わせる問題ではない。

文法、あるいは語法に関連する設問のもう一つの特徴として、文と文、節と節の間の論理関係を問う設問がしばしば出題されている事実を指摘できる。すでに確認したように、ブルヴェ試験では文学作品以外の文書が出題されることはきわめて稀である。日本で評論、あるいは論説文と呼ばれているタイプの文章が出題されることはほとんどありえない。そもそも論説文タイプの文章を読む訓練は、リセ最終学年の哲学の授業で哲学テキストを熟読することで集中的に行われる。そこで、リセ最終学年で哲学的なテキストを読むまでは、フランス語の授業で論理的な思考力を問うにも、文学作品をコーパスとせざるをえないのである。問題の検討に移ろう。

第1段落と第2段落は明らかに対立している。

a) この対立を強調している結合子は何ですか。(配点0.5)

(2000, 西部地区, ピーター・ブルック, 「観客への手紙」)

「そいつは大して年は取っていないものの、外で眠り、ワインを飲み過ぎてしまったせいで (*pour avoir dormi dehors et avoir bu trop de vin.*), 人生にやつれきった男だった」

a) イタリック体の部分はどのような論理関係を表しますか。(配点0.5)

b) この句を、おなじ論理関係を持つ、従属節に書き換えなさい。

(2009年, フランス本土, ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ【橋の下の子供】)

「私は旅籠にいる、私は腹が減った、だから (et) 私は残る」接続詞 et が表現する論理関係は何ですか? (配点0.5)

(2007年, フランス本土, ヴィクトル・ユーゴー【レ・ミゼラブル】)

最初の問題は、段落間の対立を示す結合子を抜き出すだけで事は足りる。「結合子」とは日本の中学校ではなじみのうすいタームであろうが、ここでは接続詞およびそれに類する表現と理解すれば事が足りる。1996年カリキュラムでは特に第5年級で学ぶことになっている³⁸。2番目に引用されている設問では前置詞 *pour* が理由を表していることが分かれば a) も b) も解答に苦労はしないはずである。3番目の設問では接続詞 *et* が単なる列挙、順接を示すのではなく、結果を表していることを文脈から判断する必要がある。フランス語の接続詞は多義性が強いので、文中でどのように機能しているかを考えるには、機械的に処理せず、接続詞をはさんでその前後の意味関係を押えなければならない。

d. 語彙

また、文法に次いで、数が多いのが語彙にかんする問題である³⁹。語彙についての設問は、

³⁸ Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche, *Enseigner au collège, français : programmes et accompagnement*, CNDP, 2005, p. 47

³⁹ 設問の傾向については特に以下のブルヴェ用受験参考書を参照した。Cécile MIMOUNI et Maria PINTO,

難問に属するものもあるが、平易なものも数多く散見する。

4行目から27行目で「家々」という言葉のさまざまな同義語、および家の建設に使われる材料を示す用語を挙げなさい。(配点1)

13行目以降で自然の語彙野 (champs lexical) に属する言葉を列挙しなさい (配点0.5)

(2006年、西部地区、パトリック・パール【国境】)

ジャンヌが宿屋を開ける人々を示す表現を挙げなさい。

その意味を説明しなさい。(配点1)

(2006年、北部地区、ジョルジュ・ブラッサンス「ジャンヌ」 in 【詩とシャンソン】)

最初の問題は、家や自然の同義語をある程度知っていれば難なく解けるであろう。たとえ知らなくても、文脈や文章の構造を手助けにすれば同義語を漏れなくリスト・アップすることはそれほど難しい作業ではあるまい。また、語彙野とはフランソワ・ラスチエが生み出した用語である。日本の教育現場ではあまり見かけない。しかし、ここでは語彙野を「自然」に関連する語彙群と理解すれば、この問題には十分対応可能である。語彙野という用語自体は、1996年カリキュラムでは、第6年級から頻繁に使用されている⁴⁰。2番目の問題は問題文中の「火」が「家」を示すこと(換喩)が分かれば解答に難儀しないであろう。しかも「火」と「家」の類似関係(換喩)は文脈から類推可能である。

なぜ、こうした自明とも思われる問題が多数出題されるのであろうか。二つの仮説が考えられる。一つは、コレージュ最終学年のほぼすべての生徒が受験するという、ブルヴェ試験の特殊性による。多様な学力の生徒が等しく受験する以上、学力が著しく低い受験者にも解答可能な設問をいくつかは準備しておく必要があると考えられる。もう一つの説明は、フランスの学校で求められるフランス語力による。ブルヴェ試験フランス語の解答はすべて筆記で行わなければならない。穴埋め問題や、記号問題はないのである。どれほど平易な問題を解答するにせよ、正しく分かりやすいフランス語で表現しなければ、正答には至らないのである。

以上の分析から、フランスの義務教育課程修了時に求められるリテラシーの特徴の一端が浮かびあがってくる。ブルヴェ試験で受験者に求められているのは、比較的短い文章をじっくり読み、丁寧に分析し、問題文の内容や、そこで使われている文法・語彙についての常識的ともいえる知識を、誰にでも理解可能な文章で述べることなのである。こうした目標が設定されていると仮定すると、日本の高校入試の国語とブルヴェ試験のフランス語が実施形態、設問の内容において大きく異なるのも理解できる。ブルヴェ試験が万人に開かれた、フランス語の理解力・文章力を多角的に評価する試験である以上、短時間に大量の文章を読ませ、一定の学力層

Brevet 2007, sujets corrigés : français, Nathan, 2006, 224 pp. ; Idem., *Brevet 2008, sujets corrigés : français*, Nathan, 2007, 238 pp.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 23.

の生徒を短い採点時間で選別する試験とは、いわばその考え方が違うのは当然であろう。

e. 文体

ブルヴェ試験における設問の難易度の幅が大きいということは、かなりレベルの高い設問も出題されているということでもある。しかし、難しい問題についても、日本とは若干出題傾向・意図が異なる。

たとえば、石原千秋の高校入試にかんする研究を参照しながら、2010年の高校入試問題を調査すると、物語文を題材にした読解問題では、登場人物の感情、意図、心理状態を推理させる設問が多数確認できる⁴¹。物語・小説についての設問の絶対的多数が、いわば、主体の内面にかかわる問題なのだ。そもそも中学校学習指導要領解説には以下のような読書論が展開されている。

書き手のものの見方や考え方は、〔…〕文学的な文章であれば語り手の言葉の中や登場人物の言葉や生き方の中に様々な形で表れているのが一般的である。それらをとらえ、新たなものの見方や考え方を発見したり、共感したり批判したりしながら、読み手はより豊かなものの見方や考え方を自分自身の内部に形成していく⁴²。

本稿の問題設定にとって注目すべきは、話者や登場人物の「言葉や生き方」が作者の意図、世界観を反映しているという前提（「一般的」という限定があるにせよ）に則って国語教育が構想・実践されている点である。すなわち、作者という審級は基本的な読解力の養成（「書き手のものの見方や考え方〔…〕をとらえ」と、道徳・情操教育（「共感したり批判しながら〔…〕豊かなものの見方や考え方を〔…〕形成」）という、国語教育が担っている役割に不可欠の中核として機能しているのだ。バルトの有名なエッセーのタイトルをもじれば、日本の国語教育は未だに「作者の死」を経験していないのである。

一方、フランスにおける近年のフランス語カリキュラムは、作者なる審級を想定しないのが一般的である⁴³。その結果、ブルヴェ試験で作者の意図や登場人物の心理を、あたかもそれが実体として存在するかのように問う設問に出会うことは稀である。対照的に、日本の高校入試ではほとんど見かけることがない、〈文体分析への誘い〉とも形容できそうな問題が見受けられる。

⁴¹ 石原千秋「小説入門としての高校入試国語」日本放送出版協会、2002年、286頁；『2008年受験用全国高校入試問題正解：英語、数学、国語』旺文社、2007年。

⁴² 『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説：国語編』東京書籍、平成16年（2004年）、55頁

⁴³ フランスでも、たとえば1938年のカリキュラムは「作者の考え」が作品に現前しているという考え方が、フランス語教育の前提になっている。しかし、構造主義以降こうした考え方がカリキュラムで前景化することはなくなった。Cf. La Fédération générale des pupilles de l'École, *Programmes, horaires, instructions 1937-1938*, Éditions Bourrellet, [1938], pp. 81-82.

第5段落では（15行～24行）では、登場人物の頭の中は混乱している。語彙、句読法、文章のリズム、文の形態に順番に依拠しながら、文章表現がこの印象をさらに強めていることを示しなさい。（配点2）
（2005年、東部地区、ジャン＝ルイ・エチエンヌ【北極の競歩者】）

論証に基づいている一節（「いや、確かに」から「何が起ころうとしていたのか」（15行～20行）で、感情あるいは理性のうち、どちらが登場人物の考えの中で優位を占めたかを述べなさい。答えは、文法、語彙、そしてリズムによって説明すること。（配点2）
（2003年、東部、ギー・ド・モッパッサン【ペラミ】）

語彙、統辞、そして句読点に基づいて、少女がリュシアンから送られた手紙の内容をどのように受け止めたかを説明しなさい。（配点2）
（2002年、東部地区、ジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ【春とその他の季節】）

引用した設問はいずれの問題も登場人物の心理に関連した問題である。その点において、これらの設問は日本の高校入試に頻出する心理的な設問と、難易度や洗練さの違いは認めざるをえないにせよ、本質的に類似した設問であると考えられなくもない。しかし、ブルヴェの設問はいずれも、文学作品の登場人物の心理は実体としてあるのではなく、言語操作の総体としてのテキストを通じて生成される〈効果〉である、という認識を共有している。そしてこの点こそが、高校入試問題における登場人物の取り扱い方との本質的な違いである。

また、引用した設問では、難易度の高い設問には複数の条件を付けて、受験者の解答を助ける配慮がなされている。これもブルヴェ試験の特徴である。特に熟読すべき箇所を行数で示すばかりでなく、正答を導き出すには文章のどのような文体上の特徴（語彙、句読法、文章のリズム、文の形態、統辞）に着目すべきかを詳しく指示している場合が少なくない。設問自体がテキストの読み方の手ほどきになっている。言わば、自転車にまだ上手く乗れない時に取り付ける補助輪のような役割を果たしているのである。

ブルヴェ試験では意味を生み出す文章の構造や運動に受験者の注意をうながす傾向が強い以上、修辞法にかかわる設問が多くなるのは必然といえる。指示された一節でどのような修辞法が使われているかを尋ねる設問、問題文中指示された範囲から指定された修辞法を列挙するといった基本的な設問が中心である。

母と子供の会話が最初は空回りしていることを強調する手法は何ですか？（配点1）
「本は飛び、折り畳み椅子は倒れた…」 a) […]、 b) 母親の反応を強調している二つの文彩を言いなさい。（配点0.5）

（2010年、フランス全土、コレット「ソムムの入り江にて」 in 【葡萄のつる】）

「わたしは誰にも知られていなかった、誰からも見られていなかった、誰からもたしなめられることはなかった、[…] わたしのことについて誰も何も考えていなかった。誰もわたしのことが目に入らなかった。」（9行～15行）ここで使われている文彩は何ですか。正確に説明しなさい。（配点0.5）
（2005年、フランス西部、ジョルジュ・サンド【私の人生の物語】）

しかし、ブルヴェ試験には単に問題文中で使われている修辞法を同定するだけでなく、修辞法そのものが生みだす効果を問う設問も散見される。ブルヴェ試験の読解問題では、単に文章の意味を問うのではなく、意味がどのように生成されるかを問うことが主眼である以上、修辞法が生みだす効果を問う問題が多いのも首肯できよう。

17行から29行までで、異なる頭韻法を二つあげなさい。その中の一つを選び、それがどのような印象を生み出しているかを述べなさい。(配点1.5)

(2001, 北部地区, マリー・ルーアネ「フロランスの絹糸」)

f. ジャンル

ブルヴェでは比較的頻出し、高校入試ではあまり出題されないタイプの設問がある。ジャンルにかんする問題である。たとえば自伝作品、詩が問題文である場合、どういう理由からそれが自伝、あるいは詩と断定できるのかを具体的に説明させる設問や、問題文が物語文であれば、話者と登場人物・物語世界との関係を問うといった設問である。

この問題文はどんな文学ジャンルに属しますか。(配点0.5) 三つの基準を使ってあなたの答えを証明しなさい。(配点0.5)

(2006年, 東部地区, アルチュール・ランボー「戸棚」in「詩編」)

問題文を観察しなさい。そして、この文章はどんなジャンルなのかを述べなさい。この種の文章に特徴的な手がかりを示して、あなたの答えを証明しなさい。(配点1)

(2001年, 西部地区, ピーター・ブルック「観客への手紙」)

ここではどのような視点が取り入れられていますか? 答えを説明すること。(配点1.5)

(2004年, 西部地区, ダイ・シージェ「バルザックと小さな中国のお針子」)

最初の例はランボーのソネ「戸棚 (Le buffet)」についての設問である。ソネはフランス韻文詩の基本的な形式である。節 (strophe) およびその構成 (4行節×2と3行節×2からなる)、音節 (syllabe, この詩の詩行は12音節=アレクサンドランでできている)、韻 (rime) といった、フランス詩にかんする基本的な知識があれば対応可能である。2番目に引用したピーター・ブルックの文章についての設問は、問題文の冒頭と末尾には、手紙独特の表現や日付があり、そもそも問題文には「観客への手紙」というタイトルが付されているので、それらを正しい文章にまとめればよい。一方、3番目の設問は説話論の基礎知識、特にジェラルド・ジュネットによって広まった、話者と物語世界との関係を示す専門用語を知らなければ、解答がむずかし

い⁴⁴。話者が物語世界内の登場人物をかねている（この小説では、「私」は話者であると同時に主要登場人物の一人である）ことを確認し、的確な用語〈内的視点〉（物語世界と読者をつなぐ視点は、物語世界内の登場人物＝話者によって担保されているので）を用いて解答する必要がある。しかし1996年カリキュラムに準拠したフランスのコレージュ用教科書では、ジュネットやグレマスが提唱した物語分析の用語が使われている⁴⁵。それゆえ、この設問はフランスの受験者にとっては比較的取り組みやすいものと考えられる。

こうしたジャンルにかんする問題が頻繁に出題される背景には、初等・中等教育でフランス語という科目が置かれている状況を勘案する必要があるだろう。他の科目、とりわけ理数系科目に対して、近年フランス語はその重要性が低下傾向にあると指摘されることが少なくない⁴⁶。フランス語のリテラシー養成は、フランス語という科目に頼らずとも、他の科目を通じて十分に可能である、というのがその主な論拠である。そこで、フランス語という科目は、言葉の規則を学ぶと同時に、文学的教養を身につける科目であるという従来の認識からさらに一步踏み込んで、説話論やジャンルにといった、科目固有の〈知の体系〉を構築する必要性が1996年カリキュラム作成者に働いた大きな問題意識であった⁴⁷。

g. 解釈とレトリック

以上の考察をまめると、ブルヴェ試験の設問の全体的傾向は、問題文として与えられた文章は何を意味するのかを問うよりも（これは解答する以前にすでに「読解の軸」などで示してあることが多い）、件の文章がどのように書かれているのかを問うことにあるのが分かる。

かつてミシェル・シャルルは文学作品へのアプローチの仕方は畢竟二つのタイプしか存在しないと主張した。テキストの意味を問う解釈型のアプローチとテキストの成り立ちを問うレトリック型のアプローチである。これまでのブルヴェ試験についての考察をシャルルが提唱したモデルに重ね合わせれば、現在のブルヴェ試験はテキストに対するレトリック型のアプローチに大きく傾いていると結論づけることができよう⁴⁸。

⁴⁴ Gérard GENETTE, « Discours du récit : essai de méthode », pp. 65-273 in *Figures III*, Éditions du Seuil, coll. « Poétique », 1972, 286 pp.

⁴⁵ たとえば、ブラン社のコレージュ第6年級（日本では小学校6年生に相当）用フランス語教科書のおとぎ話にかんする章を参照：Nathalie Combe (sous la direction), « Contes en tous genres », pp. 38-69 in *Français 6^e livre unique*, Belin, coll. « À suivre », 2005, 360 pp.

⁴⁶ たとえば、各科目の意義について、教員、生徒、保護者に対して行われたアンケートを参照：Le Débat : *histoire, politique, société*, n° 135, mai-août 2005, p. 5.

⁴⁷ 以下の雑誌の特集号を参照。この号は主にリセの新カリキュラムを扱ってはいる。しかし、1990年代後半のコレージュ、リセのカリキュラム改訂の要因となったフランス語教育の諸問題が、カリキュラムを作成した文学系科目専門会委員や総視学官によって多角的に論じられている点で示唆的である。L'École des lettres, n° 7, 1^{er} décembre 1999, 144 pp.

⁴⁸ Michel CHARLES, *L'Arbre et la source*, Éditions du Seuil, coll. « Poétique », 1985, 335 pp.

4. ブルヴェ試験に必要な作文力

作文問題は、読解問題とおなじく、時間配分、配点において重要な位置を占める。繰り返しになるが、作文問題の解答時間は1時間30分、配点は15点である(40点満点)。業務通達は作文について以下のように規定している⁴⁹。

読解問題の問題文に関連する作文の課題が受験者に出題される。この課題を解答することで、受験者はコレッジで学んだ一つあるいは複数のディスカールのタイプを作文することになる。受験者が書く作文がどのようなコミュニケーションの状況下のものであるかは、設問に明記される。

この行政文章のポイントは三つある。すなわち、1) 作文の課題は読解問題の問題文に関連すること、2) 受験者はコレッジで学んだディスカールの複数のタイプを活用すること、3) 受験者が書く作文の発話状況は設問が明示すること、である。『要綱』はさらに踏み込んで、これらを補足し、問題に付される指示(consignes)は「受験者に求められている作業」をより明確にすると同時に、「〈採点基準作成〉の土台となる」と述べている⁵⁰。一方、意外なことだが、受験者が書く作文の長さにかんする指示は、業務通達にも、『要綱』にも見当たらない⁵¹。

設問を検討しよう。日本の試験文化からすると、作文に割り当てられている解答時間は破格の長さである。その時間を使って受験者には具体的にどのような作業が求められているのだろうか。また、上の三つの条件は設問の中にどのように組み入れられているのだろうか。

しばらくして、父がビーチにいる家族に合流する。三人の登場人物の間で会話が始まる。母は夫について先程起こったことを説明する。ジョジョは反論する。父は二人を和解させようとする。会話を書きなさい。

正答の基準

- ・コレットの文章のように、叙述文と会話を交互させること。
- ・会話の特徴を尊重しながら執筆し、それが会話であることを示すこと。
- ・会話の内部で、登場人物は語り、説明し、論証すること。
- ・最初の問題文との一貫性に留意すること。
- ・言葉遣いの正確さに留意すること。

(2010年、フランス全土、コレット「ソナムの入り江にて」in「葡萄のつる」)

⁴⁹ « Note de service n° 99-123 du 6-9-1999 relative aux modalités d'attribution du diplôme national du brevet », *Bulletin officiel de l'éducation nationale*, n° 31 du 9 septembre 1999.

⁵⁰ *Diplôme national du brevet, série collège : Français : annales zéro*, CNDP-DESCO, 1999, p. 4.

⁵¹ 行政、教員、そして受験者のあいだで、この程度の難易度であれば、規定の1時間30分で書ける文章の長さについて、暗黙の了解が成立しているということなのだろうか。今後の調査の課題としたい。

まず、問題文を要約しておこう。母がビーチでのんびり本を読んでいると、兄のジョジョが妹のジャンヌが溺れたと騒ぎ立てる。息子の言葉に一瞬母は動転するものの、砂遊びをしているジャンヌの姿がすぐに目に入り、母は息子をたしなめる。問題文は、物語世界に参与していない話者の視点から、このいきさつを母とジョジョの言葉のやり取りを中心に、ユーモラスに語っている。

作文では、問題文とおなじ場面を母の視点からとジョジョの視点から父に対して語り直し、さらに二人を和解させる父の視点を導入することが求められる。このように、父、母、ジョジョそれぞれの発話状況を細かく規定することにより、業務通達の第3の条件が満たされる。また、読解問題の問題文が語っている出来事をそれぞれの登場人物の視点で語る作業は、業務通達が求める第1の条件（＝課題と読解問題の問題文との関連）を満たすことに他ならない。作文と問題文とを関連づける条件を設定することにより、受験者は問題文の内容を改めて理解・整理しなければならない。さらに、課題は会話文と叙述文が交互に展開すること、会話の中でそれぞれの登場人物が自分の経験を語り、自分の主張・論拠を説明・論証することを求めている。これによって、複数のディスクールを使い分けるという業務通達が示す第2の条件も満たされる。

このような複雑な条件を作文の課題を付さずに、受験者に自身の考えを比較的自由に語らせる設問が少数ながら散見しないわけではない。たとえば、以下のような課題である。ここでは、課題作文の発話状況、受験者が書くべき内容は限定されているものの、問題文と作文との関連は上に紹介した例ほど緊密ではない。

ジョルジュ・サンドは、男のように服を身につけ、生活して、当時の社会に衝撃を与えた。コレージュ4年生の少年あるいは、少女が、大抵は自分とはちがう性別の人しかすることのない活動（たとえば女性では、ラグビー、電気技師、配管工、男子では、クラシック・ダンス、育児学、助産婦の仕事）に興味を持ってしまう状況を想像してみよう。周りの男女差別的な論拠に対して、この少年・少女は、学校新聞で反論することを決意する。

指示：

- ・発話の状況を尊重すること。
 - ・また、文章は匿名でありながらも、手紙の書き方、体裁がもつ特徴を尊重すること。
- 手紙の作者はまず、どのようないきさつでこのような興味が生まれたかを語り、後にしっかりした構成・論拠をもった文章で、手紙を書くに至った理由を説明する。

(2005年、西部地区、ジョルジュ・サンド【私の人生の物語】)

しかし、ブルヴェの作文の課題の大半は、解答により多くの条件を付している。解答には複雑な言語操作を行うと同時に、問題文を多様な視点から再構成できるまでに深く理解する必要がある。内容についても課題作文ではどのような発話状況のもとで、どのような内容のことを書くべきか、踏み込んだ指示がなされているのが一般的である。このことから、作文問題で評価・採点の対象になるのは、受験者の〈主張、考え〉のオリジナリティーや正しさではないことが

分かる。そうではなく、あくまで重視されるのは、問題文独自のロジックを理解したうえで、多重に限定された条件のもとで文章を編み出す、言語運用能力なのである。古典的なレトリックの区分に従えば、作文問題解答に必要なのは、内容を考えだす発想 (invention)、あるいはその内容を構成する配列 (disposition) よりも、むしろ文彩、文体からなる修辞 (élocution) の技術であると結論づけることができよう。

アンドレ・シェルヴェル、アントワヌ・コンパニオン、ジェラルド・ジュネットらによる、近代・現代フランスにおけるフランス語教育の歴史を検証した研究を参照すると、作文教育の軸が、1880年から20世紀初頭にかけて修辞中心から、発想、特に配列を重視した教育に移ったことが読みとれる⁵²。そして、1990年代後半から2000年代前半にかけて行われた改革には、発想、配置を中心とした教育から再び、修辞を中心とした教育への方向転換を見ることが可能である。

ブルヴェ新形式の問題が「要綱」を通じて発表された際、現場の教員や大学教員をはじめとするフランス語教育関係者の反発を招いた主な理由は、文学以外の文章が問題文として使われたことに加えて、作文の出題形式が変更されたことにあった。

2000年以前のブルヴェ試験では、作文問題には「想像力を問う問題」と「考察力を問う問題」の2種類の問題が出題され、受験者はその一つを選択することができた⁵³。ところが、1996年カリキュラムがコレッジ全学年で施行された2000年から実施されているブルヴェ試験の作文では、「考察力を問う問題」が廃止されたのである。もちろん、先に見たように、新形式のブルヴェ試験でも文学作品を問題文としながら、受験者の論理的思考を問う工夫がなされている。読解問題の設問で文と文、あるいは語句と語句の論理関係を問う設問を配し、作文問題では多様な条件が設定されている。にもかかわらず、一部の教員からは、新形式のブルヴェ試験の問題は、受験者の考察力をはかることをないがしろにしていると、批判されている。そもそも、20世紀の中等教育におけるフランス語教育は、ディセルタションと呼ばれ、緊密な論理構成が要求される小論文に生徒が対応できることを目標に構成されてきた。ブルヴェ試験における「考察力を問う問題」の廃止は、こうした伝統を重んじる教員の目からすれば、中等教育に

⁵² André CHERVEL, *La Culture scolaire*, Belin, coll. « Histoire de l'éducation », 1998, 239 pp. ; Antoine COMPAGNON, *La Troisième République de lettres : de Flaubert à Proust*, Éditions du Seuil, coll. « Poétique », 1983, 384 pp. ; Idem., « Après la littérature », *Le Débat*, n° 110, mai-août 2000, pp. 136-154. ; Gérard GENETTE, « Rhétorique et enseignement », pp. 23-49 dans *Figures II*, Éditions du Seuil, 1969, 293 pp. ; 拙論「近代化と言語表現の秩序：19世紀フランスにおける文学教育」, 143-193頁 in 「近代秩序への接近：制度と心性の諸断面」, 日本経済評論社, 1999年, 285頁。

⁵³ 1996年カリキュラム以前のブルヴェ試験の実態については今後の課題である。以下の参考書では、数は少ないものの模擬問題に加え、実際の試験で使用される解答用紙も採録されており、1999年以前のブルヴェ試験についておおよそのイメージを抱くことができる。Françoise BAGOT, *L'Épreuve de français : au brevet des collèges*, Vuibert, 1986, 159 pp.

おけるフランス語教育をその根底から脅かす施策と映ってしまうのである⁵⁴。

結論

これまでの分析をまとめ、問題点を整理することでとりあえずの結論としよう。まず、ブルヴェの読解問題の設問の分析を通じ、設問の主眼は、問題文が提示する物語世界がどのような言語操作によって成り立っているかを受験者が理解しているかをはかることであることが確認できた。それ故、受験者に求められるのは物語世界に入り込み、登場人物の経験・感覚・視点を共有することよりはむしろ、物語世界から批判的距離を取り、分析的な視線を投げ掛けることなのである。

難易度、解答方法についても注目すべき特徴があった。設問の難易度の幅が大きいのだ。解答するのが極端に容易な問題も数多く見られる。しかし、解答に当たっては、記号や抜き書きによってではなく、文章で答えることが求められる。こうした出題傾向の根底には、当たり前のことを文法的にも論理的にも正しい文章で表現する能力の養成こそが、高度の思考力・文章力の大前提であるという認識があると考えられる。また、作文問題では受験者が自らの考えや経験を表現することを重視するのではなく、作文に複数の制約を課することによって、受験者の文章力に問いかける問題が大勢を占めている。

フランス語を母語としない生徒が少なくないフランスで、文章力をここまで重視するブルヴェ試験のあり方が、果たしてコレージュ最終学年在籍者がほぼ全員受験する学力試験として正当かどうかを、エスノセントリズムの名において問うことは、もちろん可能である。文章力に特化した問題形式は、フランス語を母語としない生徒たちにますます大きなハンディを負わせることになるからである。仮に、日本のように穴埋め、記号問題を適宜配置すれば、フランス語を母語としない受験者の得点が大きく上昇することは想像に難くない。もっとも、フランスの教育関係者からすれば、穴埋めや抜き出しの多い日本の高校入試は、個々の受験者が持っている文章力を十分に見極めようとしていない点で、そして、評論と呼ばれる流行のテーマを追跡しただけの文章を過度に重視し、自国の古典をないがしろにしている点で、母国語の学力

⁵⁴ たとえば2000年3月に【ル・モンド】に掲載された2本の意見記事や、現役コレージュ教員の証言を参照すると、フランスの中等教育におけるディセルタシオンの象徴的価値がどれほど大きいか分かる：
 « C'est la littérature qu'on assassine rue de Grenelle », *Le Monde*, p. 18, le 4 mars 2000 ; Fanny CAPEL et Emmeline RENARD, « Contre la suppression de la dissertation au baccalauréat », *ibid.* ; Mireille GRANGE, « Témoignage sur le collège » pp. 13-29 in Michel Jarrety (sous la direction de), *op. cit.*
 一方、フランスの中・高等教育にディセルタシオンが及ぼしてきた功罪については Antoine COMPAGNON, « Persuadez votre enfant d'étudier la littérature », pp. 57-64 in Michel Jarrety (sous la direction de), *op. cit.* を参照。また、バカロレアにおけるディセルタシオンのあり方の変遷については Violaine HOU-DART-MÉROT, *La Culture littéraire au lycée depuis 1880*, Adapt et Presses universitaires de Rennes, coll. « Didact français », 1998, 274 pp. を参照。

試験としては不十分に見えるかも知れない。

ビューイソンの『教育学事典』の「試験」の項目には、「試験は教育を統率する」という旨の記述が見られる⁵⁵。改めてビューイソンを引くまでもなく、問題の意図、解答方法がこれほど異なれば、それに至るまでのプロセス、つまり日々の教育のあり方が日本とは大きく異なるのは想像に難くない。恐らく、理科や数学では、設問の内容、ねらいにこれほど大きな違いは生じえないのではなからうか。

どうやら国語教育を考えるには、その根底にあるそれぞれの国、地域の文化の差異を完全に無視することはできないようだ。国語とは何を教える科目なのか、知識、能力と行った概念以外の補助線を使って、改めて問い直す必要があるだろう。

その観点からすると、欧州連合内で、教育の質・内容の均質化がはかられる中で、おそらく知識・能力に還元できない何かを伝達することを担わされてきた国語科目、とりあえず、あえて単純な言い方をすれば、グローバル化の中でナショナルなもの（審美観、シンボル、国民性など）の伝達を自らの役割として引き受けてきた国語という科目が、今後どう再組織されていくのかを、追跡、分析することにより、日本の国語教育にも刺激的な知見を得ることが期待できるだろう⁵⁶。

« Éléments de la bibliographie et sitographie »

ブルヴェ試験の問題収集に際し、以下の受験参考書、学習支援サイトを参照した。

Céciles de CASANOVA et Antoine GASQUEZ, *Annabrevet, sujets et corrigés 2006 : français*, Hatier, 2005, 205 pp.

Céciles de CASANOVA et Antoine GASQUEZ, *Annabrevet, sujets et corrigés 2007 : français*, Hatier, 2006, 240 pp.

Céciles de CASANOVA et Antoine GASQUEZ, *Annabrevet, sujets et corrigés 2010 : français*, Hatier, 2009, 235 pp.

Philippe LEHU et Sandra MOURAD, *Annales corrigées du brevet : français, 2007*, Vuibert, 2006, 159 pp.

Cécile MIMOUNI et Maria PINTO, *Brevet 2006, sujets corrigés : français*, Nathan, 2005, 194 pp.

Cécile MIMOUNI et Maria PINTO, *Brevet 2007, sujets corrigés : français*, Nathan, 2006, 224 pp.

Cécile MIMOUNI et Maria PINTO, *Brevet 2008, sujets corrigés : français*, Nathan, 2007, 238 pp.

Brigitte RÉAUTÉ et Michel LASKAR, *Brevet annales 2006, sujets et corrigés*, Hachette, 2005, 224 pp.

Brigitte RÉAUTÉ et Michel LASKAR, *Brevet annales 2007, sujets et corrigés*, Hachette, 2006, 224 pp.

Brigitte RÉAUTÉ et Michel LASKAR, *Brevet annales 2010, sujets et corrigés*, Hachette, 2009, 208 pp.

Weblettres : <http://www.weblettres.net/brevet/index.php>

また、フランス国民教育省の【官報】からの引用の際には、URLアドレスを明示していない。【官報】

⁵⁵ *Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire* / sous la direction de Ferdinand BUSSON, 1882, Hachette.

⁵⁶ たとえば、近年欧州連合内では、ヨーロッパ文学の教育を推進しようとする動きが顕著である。この動きは、いずれは各国の〈国語教育〉のあり方に何らかの影響を及ぼさないではないだろう。Cf. Assemblée parlementaire / Conseil de l'Europe, « Promouvoir l'enseignement des littératures européennes », 15 décembre 2008, [document disponible sur <<http://assembly.coe.int/Documents/WorkingDocs/Doc08/FDOC11779.pdf>>, vu le 2 septembre 2011].

の検索サイト「Mentor」等を使えば読者は容易に件の行政文章にアクセスできるからである。

表 1

| 年 | 地区 | 作者 | 作品名 | ジャンル |
|------|----|--------------|-----------------------------|-------|
| 2011 | 全土 | ロマン・ギャリー | 『空の根っこ』 | 小説 |
| 2010 | 全土 | コレット | 『ソナムの入り江にて』 in 『葡萄のつる』 | 小説 |
| 2009 | 全土 | ル・クレジオ | 『橋の下の子供』 | 小説 |
| 2008 | 全土 | エミール・ゾラ | 『ミシュー大将』 in 『ニノンへの新しいお話』 | 小説 |
| 2007 | 全土 | ヴィクトル・ユーゴー | 『レ・ミゼラブル』 | 小説 |
| 2006 | 東部 | ランボー | 『リュッフエ』 | 詩 |
| 2006 | 西部 | パトリック・バール | 『国境』 | 小説 |
| 2006 | 南部 | ローラン・ゴージェ | 『スコルタの太陽』 | 小説 |
| 2006 | 北部 | ジョルジュ・ブラッサンス | 『ジャンヌ』 in 『詩とシャンソン』 | シャンソン |
| 2005 | 東部 | ジャン＝ルイ・エチエンヌ | 『北極の競歩者』 | ルポ |
| 2005 | 西部 | ジョルジュ・サンド | 『私の人生の物語』 | 自伝 |
| 2005 | 南部 | クロード・ミシュレ | 『一度に7人が』 | 小説 |
| 2005 | 北部 | ピエール・ベジュ | 『小さな女城主』 | 小説 |
| 2004 | 東部 | ミシェル・トゥルニエ | 『スズラン・サービスエリア』 in 『オオライチョウ』 | 小説 |
| 2004 | 西部 | ダイ・シージエ | 『バルザックと小さな中国のお針子』 | 小説 |
| 2004 | 南部 | ブリュノー・クレメール | 『ある若い男』 | 自伝 |
| 2004 | 北部 | フィリップ・ドレルム | 『個人的な骨董品』 | 自伝 |
| 2003 | 東部 | モーパッサン | 『ベラミ』 | 小説 |
| 2003 | 西部 | レジヌ・ドタンベル | 『子供時代の複製写真』 | 自伝 |
| 2003 | 南部 | クロード・セニョーレ | 『ラルザックの宿屋』 | 小説 |
| 2003 | 北部 | シュールベルヴィエル | 『世界の寓話』 | 散文詩 |
| 2002 | 東部 | ル・クレジオ | 『春とその他の季節』 | 小説 |
| 2002 | 西部 | アニー・デュベレー | 『黒いヴェール』 | 自伝 |
| 2002 | 南部 | ピエレット・フルシオー | 『僕らは不死身だ』 | 小説 |
| 2002 | 北部 | エドモンド・ロスタン | 『シラノ・ド・ベジュラック』 | 演劇 |
| 2001 | 東部 | アレクサンドル・デュマ | 『モンテクリスト伯』 | 小説 |
| 2001 | 西部 | ジャン＝クロード・イゾー | 『マルセイユ』 | 自伝 |
| 2001 | 南部 | ジャン・アヌーイ | 『泥棒たちの舞踏会』 | 演劇 |
| 2001 | 北部 | マリー・ルーアネ | 『フィレンツェの絹糸』 | 小説 |
| 2000 | 東部 | ジョルジュ・サンド | 『私の人生の物語』 | 自伝 |
| 2000 | 西部 | ピーター・ブルック | 『観客への手紙』 | 書簡 |
| 2000 | 南部 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 2000 | 北部 | ヴィクトル・ユーゴー | 『レ・ミゼラブル』 | 小説 |